しんらん講座だより

-SHINRAN LECTURE NEWS-

VOL.8

発行所：長浜・五村別院
長浜市元浜町３２－９
代表者　宮戸　弘
編　集：両別院教化推進委員会
お問い合わせ：
長浜：０７４９（６２）００５４
五村：０７４９（７３）３１３３
FAX：０７４９（６２）０７５４
MAIL：
shinran.lect@gmail.com

二〇二一年度 第四講要約（六月十五日）

講師・訓覇浩氏

はじめに

今年度最後のしんらん講座となりました。昨年からの連続で考えると八回目となります。ここまでお付き合いくださいました皆さまに、こころから感謝申しあげます。またまた毎回アンケートにご記入いただき、ご質問やご意見、ご感想を言葉にして届けてくださいました。当初から願っている、双方向参加型研修、双方が「応答」しあうという事が、しんらん講座の大事なスタイルとして定着してきたかなと思っております。

それでは今回も、前回のアンケートにあった事柄から入っていきたいと思います。まず、水平社からの問いかけという流れでお話しした事に対して、何人かの方が反応してくださいました。ひとつは「寺格は差別」という事に対して、そしてもう一つは、御伝鈔で述べられる「本願寺聖人」という事に対してです。両方とも前回資料もお示ししてお話しした事ですから繰り返しませんが、あらためて確認だけしておくと、「寺格」は単なる差別ではなく「部落差別」であるという事です。単なる差別という言い方もおかしいかもしれませんが、現在の問題として「部落差別」に通ずる具体的な「身分差別」であるという事です。

「貴賤」という価値観がもとになる身分差別です。その象徴が「院家」であり、「穢多寺」という寺格であるとお伝えいたしました。したがって、寺格を廃止する時、だからこそ廃止しなければならないという自覚がなければ、これは解放運動からの問いかけに応答した事にならないのではないかという事をお伝えさせていただきました。

そしてもう一つが、親鸞聖人の出自が天児屋根尊（あまつこやねのみこと）や藤原氏に通じる事を強調する「本願寺聖人」という宗祖観です。この事については、親鸞聖人がどのような人たちと共に生きようとされたのか、「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり」と頷かれたつながりを生きられた宗祖のお姿から見えてくる聖人像はどのようなものであるのか、という事への部落差別を受けてきたご門徒からの厳しい問いかけが、「首飛ぶような念仏称えた人親鸞」という言葉であると思います。この事につきましては、もう一つ、ご質問が多かった「悪人」という言葉に関わってくる問題ですが、この「悪人」という言葉につきましては、前回とても唐突感があったという事ですので、今回あらためて少しお話していきたいと思います。

①他力をたのみたてまつる悪人

「他力をたのみたてまつる悪人」という言葉を前回のテーマとして出させていただいておりますが、この言葉は皆様よくご存じの『歎異抄』第三章にある言葉で、この後「もっとも往生の正因なり」という言葉に続きます。私は、この悪人という言葉を、何の疑問もなく「自力作善の心を翻して他力をたのむ人」というように、大学の歎異抄の講義で教わるまま了解していました。ただ漠然と、**「善悪のふたつ総じてもって存知せざるなり」**と仰っているのに、なぜわざわざ「悪人」という言葉を、「往生の正因」を表す言葉として用いられたのだろう、という疑問は残っていました。しかし、その疑問を打ち消すように、悪人というのは自らを悪人であると自覚している人なのだと言い聞かせていたように思います。そのような中で出会ったのが、河田光夫先生の『親鸞と被差別民衆』という大谷大学で開催された真宗学会での講義でした。それは衝撃的な内容でした。まず「悪人」という言葉の前提が、私がそれまで頷いてきたものと全く異なりました。乱暴に言ってしまいますと、「どこかに悪人と呼ばれる人がいるのではない、自覚の言葉なのだ」とそれまで受け止めていた事とは正反対の、親鸞聖人が生きられた時代に「悪人」と呼ばれた人が実際にいたのだ、と語られたのです。さらにその人たちは「被差別民衆であった」と。そして、そこから親鸞の悪人正因という思想が生まれていったと展開していかれました。もちろん、その事が本願の正機を、曽我先生のお言葉を借りれば**「いづれの行もをよびがたき身なれば、とても地獄は一定すみかぞかし」**、往生の因

しんらん講座に参加して みんなの声

▼曽我量深師の「自分が機の深信を欠いていた」と言われる言葉の深さに、今まで思い至りませんでした。機の自覚を観念的にしか認識していなかったことに気づかされました。

▼聖人は、「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」と教えていただきますが、我欲にまみれた私にとっては、「唯除五逆誹謗正法」の言葉の前に立ちすくんでしまい、素直にうなずけない思いがしています。

▼今回のような法座にお会いできて感慨深いものがあります。来年度以降も引き続き訓覇師にご出講いただきたいと思います。

▼一つの言葉で傷つく人の存在が見えるのが機の自覚であり、差別者の自覚です。傷つく人の存在が見えているのかと自分に問うてみると、そうなっていない自分であると言わざるをえません。差別者の自覚についての先生の説明が、親鸞聖人の逆説的展開とつながるのではと思いました。

▼「曽我量深の表白」のお話を聞いて、今更ながらこのように表現、告白されたことの意味、重みを感じています。

▼「いし・かわら・つぶてのごとくなるわれら」と言われた宗祖のことが、まるでわかっていなかった自分がいます。というか、どこまでいってもわかり得ない自分（差別する側にいる自分）に気付きました。

▼「是旃陀羅」はなぜ経典にあるのですか？是旃陀羅とはじしめての和讃を、どうしても頂けません。直叙としても、それが差別を機能するところがあるように思えます。

▼十八願　唯除の意味が長く理解できませんでした。王本願と呼ばれる中で、唯除、つまり対象から外れてしまう者がいるということが矛盾に思えてきたのですが、ストンと落ちました。自分の言葉で整理するところまでは、まだいけませんが、意味が理解できました。ありがとうございました。

▼十分に理解できなかった。思いが及ばない。無戒と比丘の矛盾。もう一度詳しく知りたいです。

▼歎異抄第一章に「ただ信心を要とすとしるべし。」とあるが、「信心」とは何か。また、どうすることか。

▼「唯除五逆」の言葉が印象に残りました。ただ私が除かれるのが嫌だからでしょうか。

▼「具縛の凡愚、屠沽の下類（悪人）が往生の正因となる」という説明がとてもすばらしく感動しました。生身の人間は、常に「煩」と「悩」とのはざまで、矛盾を抱えて生きねばならない悲しい存在であることも痛感しました。

▼「屠沽の下類（悪人）との出会いがなければ、具縛の凡愚が悪人であるという自覚が生まれなかったのではないか」というお話から、「悪人とは具縛の凡愚である」と浅くとらえていた自分に気づけました。悪人正機がより深くなったように感じます。

編集委員のひとこと

▼今年度はコロナ差別、ハンセン病問題、水平社の創立、大逆事件等、様々な社会問題を通してこの濁世の具体的な相に向き合わせていただき、また、そのどれもが信心と深く結びついた課題であると教えていただきました。なかでも、普遍的な言葉の奥には、具体的な事実があったのだと教えていただき、今までお聖教の言葉を、一面的な理解でしか受け止めていなかった自分を思い知らされました。予測できないことが次々と起こる現代社会を生きるとき、先生が繰り返し仰った「赤表紙と新聞の間に身を置く」ことの大切さをかみしめています。（F）

二〇二三年度 しんらん講座

「本願ニ帰ス」
―『宗祖親鸞聖人』を読む―

講師　訓覇浩師

二〇二二年
① 九月　六日（火）
② 十一月十五日（火）

会場　五村別院

二〇二三年
③ 三月十四日（火）
④ 五月　九日（火）

会場　長浜別院

＊一回 五〇〇円
＊十三時受付
＊十三時半～十六時

も手懸りもないと自覚している人が「悪人」という頷きを否定するものではないと思います。このようなある意味普遍的な本願の正機の頷きに至る過程のところに、具体的な被差別民衆との出会いが親鸞聖人の中であったのではないかという事です。だから、あえて本願の正因を具体的な生活の中で出あわれた「悪人」という言葉で表現されたのではないか。このあたりまで来ると、河田先生の了解というより、私自身の頷きという事になってきますが、私の中では、今もそのようにこの悪人という言葉をいただいております。

その事は前回も紹介した、同朋会のテキスト『宗祖親鸞聖人』第七章の、流罪後越後で出会われたものが記される、

辺地の荒涼とした自然であり、富や権力などとはまったく無縁に、人間としての命を赤裸々に生きている人々のすがたであった。そこには、善根を積むことはおろか、生きのびるためには、たとえ悪事とされていることでも、あえて行わなければならない悲しさをかかえた人々の生活があった。

という言葉や、その後「法語」として掲げられる、『唯信鈔文意』の次の一文とも重なってまいります。

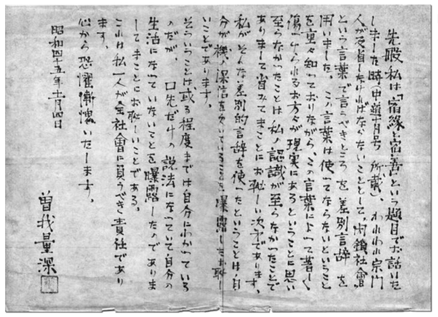
ひとすじに、具縛の凡愚、屠沽の下類、無碍光仏の不可思議の本願、広大智慧の名号を信楽すれば、煩悩を具足しながら、無上大涅槃にいたるなり。具縛は、よろずの煩悩にしばられたるわれらなり。煩は、みをわずらわす。悩は、こころをなやますという。屠は、よろずのいきたるものを、ころし、ほふるものなり。これは、りょうしというものなり。沽は、よろずのものを、うりかうものなり。これは、あき人なり。これらを下類というなり。「能令瓦礫変成金」というは、「能」は、よくという。「令」は、せしむという。「瓦」は、かわらという。「礫」は、つぶてという。「変成金」は、「変成」は、かえなすという。「金」は、こがねという。かわら・つぶてをこがねにかえなさしめんがごとしと、たとえたまえるなり。りょうし・あき人、さまざまのものは、みな、いし・かわら・つぶてのごとくなるわれらなり。

「具縛の凡愚」という人間の普遍的な了解と「屠沽の下類」という極めて具体的な現実存在が、並列に並べられ、無上大涅槃にいたる存在である事が語られているのです。「屠沽の下類」という言葉についてのリアルな表現からも、親鸞聖人が実際にこのように見なされている人と共に生きようとされていた事が伝わってまいります。そこから考えると、煩悩具足という言葉も、生き物を殺さなければいのちをつなぐことができない、しかし、いのちを殺せばこころが悩むという、辺地で生きる人たちの苦しみと悲しみの中に頷かれていった言葉であると、読み取る事が出来るのではないでしょうか。

その事は、親鸞聖人が「無戒名字の比丘」という言葉を大切にされた事にもつながってくると思います。『教行信証』「化身土巻」に引かれる「末法灯明記」にある言葉ですが、無戒とは、破戒という事とは少しニュアンスが異なると思います。戒の基本は、「五戒」つまり不殺生戒、不偸盗戒、不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒というもので、これは比丘であることの基本、というより人間として生きていく事の基底にあるものといってよいと思いますが、人間として五戒を守るというところから逆転してしまうと、五戒を守るのが人間だ、という事になってしまいます。そうなるとこの五戒というものが、人間でないもの、人間とは認められないものを生み出してしまうはたらきを持つ事になります。戒が人間を縛るだけでなく、人間でないものを作り出してしまう。そのようなはたらきに対して、濁世を生きる「真宝」として「無戒名字」という言葉が見出されていったのではないでしょうか。そういうところから、親鸞聖人は本願の正機、正因、あるいは機の深信という事も頷いていかれたのではないかと思っております。

少し脇にそれる話になるかもしれませんが、以前にもご紹介した、曽我量深先生が差別言辞を用いて講演をされた事に対する、部落差別問題に取り組む人たちからの厳しい問題提起に、ご自身が応答された「慚愧陳述書」といわれる文章の中で**「この言葉は使ってならないということを重々知っておりながら、この言葉によって著しく傷つけられるお方々が現実にあるということに思い至らなかった」「私がそんな差別言辞を使ったということは、自分が機の深信を欠いていることを暴露したお恥ずかしいことであります」**と述べられております。

【慚愧陳述書】



その事に対して、廣瀬杲先生は、「機の深信という事が、こういう具体的な人間の事実を頷く事により、共存する人間の地平をひらいていくような原点になっていかなくては、機の深信という事も観念にしか過ぎない」と語られた事を記憶しております。「他力をたのみたてまつる悪人」という言葉を、あらためてそのような地平から向き合い直してみたいと思っております。

②本願にそむくもの

さて、最後のテーマになってまいりましたが、本願にそむくものという言葉について少しお話して今回の講座を終えていきたいと思います。

この「そむく」という言葉で、これまでも多くの人が向き合ってこられたのが、第十八願のいわゆる「唯除の文」だと思います。その唯除の文に対して、親鸞聖人御自身が、

「唯除五逆　誹謗正法」というは、唯除というは、ただのぞくということばなり。五逆のつみびとをきらい、誹謗のおもきとがをしらせんとなり。このふたつのつみのおもきことをしめして、十方一切の衆生みなもれず往生すべし、としらせんとなり。

（「尊号真像銘文」）

と記されております。「仏説無量寿経」の本願文、成就文の言葉から見ていくと、

設我得佛、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念。若不生者、不取正覺。唯除五逆　誹謗正法。

諸有衆生、聞其名號、信心歡喜、乃至一念。至心回向。願生彼國、即得往生、住不退轉。唯除五逆　誹謗正法。

一切衆生を救済する事を誓う本願文、その願いが成就した事を証す願成就文ともに「唯除の文」がおかれています。**「唯除というは、ただのぞくということばなり」**、何から除かれるのか、それは本願から除かれるという事です。では何が除かれるのか、それは「本願にそむくもの」が除かれると言ってよいと思います。唯という言葉に対して親鸞聖人は、「ふたつならぶことをきらうことば」と言うように、とても厳しい言葉として読み取っておられます。唯除とは絶対的に除かれる、という言葉であると思います。「十方一切の衆生みなもれず往生すべし」という言葉は、決して安易に、本願にそむくものも救われる、と領いてはならない言葉であると思います。

しかし、私たちの中にある本願は全てのものを救済するという前提が、そのような受け止めをさせてしまうのだと思います。私は、そのような受け止めが、本願が人間を救うということの意味を、曖昧にしてしまうのではないかと感じています。もし、本願にそむくものでも救われるという意味で唯除の文がおかれているとするなら、なぜ成就文にも置かれているのかの説明がつかなくなってしまいます。そこに大切になってくるのが、「つみのおもきことをしめして」という言葉ではないでしょうか。本願のはたらきを、人間を人間にしてくれるものであるとするなら、本願にそむく罪とは、人間を人間でなくするはたらきに与するという事であると思います。本願が人間の上にはたらくという事の否定、あるいは本願のはたらきへの刃、というような性質。それがまさしく、今回の講座の中で確かめてきた、差別、同化、隔離などという、人間が独尊する存在である事を絶対否定するはたらきです。その本願のはたらきへの刃がいかなるものであるかを示し、示される事によって、その刃がいかなるものであるかを信知する、その事が「十方一切の衆生みなもれず往生すべし」という事の内実であると受け止めてよいのではないでしょうか。あくまでも、本願にそむくものでも救われるのではなく、親鸞聖人は、逆謗にさらにもうひとつ「一闡提」というものを加え、「本願毀滅のともがら」と厳しく表現されます。本願にそむくという事の罪の重さを知る、その罪の重さをしる事は慄くしかないような事であると思いますが、それを知るというところにこそ人間が救われるという事が成り立つ。本願にそむくもの唯除くと誓った如来の本願が、本願にそむくもの唯除くと受け止め切る衆生の誕生をもって成就する。願いが成就したとき、唯除逆謗という事が解消されるのではなく、絶対的に本願内存在であるはずの衆生に対して「本願にそむくもの唯除く」と語らねばならない悲心、すなわち唯除逆謗という本願を生きる私が誕生する。その意味で、唯除逆謗というところにこそ、本願の性質が込められていると私はいただいております。

私を問い糾してくれる本願の声、それは、本当に本願が人間の上にはたらく国に生きたいと願うのか、それとも、本願と無縁な国、本願にそむくことが価値となる国に生きたいと願うのか、そのような究極の問いかけであると思います。その声に対して「唯信」、「はい」と応えていく身、それは、いま濁世に生きる、この身しかないのだと思います。その身を私は確かにここにいただいております。

大変乱暴な物言いで、タイムアップになってしまいましたが、このあたりで今年度のしんらん講座のお話、終らせていただきたいと思います。ありがとうございました。